

広島大学新収石山寺本『玄應一切經音義』 卷第十承安五年写本

佐々木 勇

一、本稿の目的

仏典研究あるいは仏典を用いた研究は、高麗再雕版を底本として諸本の異同を記した『大正新脩大藏經』本文に基づき、進んできた。

しかし、近年、それとは異なる本文を持つ古写経および宋版をも対象に含めた研究が注目されている¹⁾。

本稿は、仏典解釈あるいは中国中古音資料として古来重視されてきた『玄應一切經音義』古写本のうち、二〇一三年十一月に広島大学中央図書館の所蔵となった、石山寺本『玄應一切經音義』卷第十承安五年（一一七五）写本を諸本中に位置づけるとともに、日本古写経を用いた仏典研究の必要性を説くことを目的とする。

二、『玄應一切經音義』本文に関する先行研究と課題

1. 本文の書式に関する先行研究

玄應撰『一切經音義』は、玄奘三藏（六〇二—六六四年）のもとで訳経にあたった玄應が七世紀中頃に作成した諸経の音義である。玄應撰『一切經音義』は、撰録後ただちに広まったらしく、八・九世紀書写本が、ロシア・イギリス・フランス・ドイツなど各地に所蔵されている²⁾。宋版・高麗版・金版一切経にも収載され、今に伝わる³⁾。

日本でも、「正倉院文書」に天平や天平勝宝の書写記録が見られ、聖語藏に天平書写の卷第六（首尾欠）が蔵されている。またまった古写本としては、法隆寺旧藏書陵部藏大治写本（大治本）、石山寺旧藏広島大学等藏承安・安元写本（石山寺本）、中尊寺旧藏高野山藏永久（天治頃写本（中尊寺本）、七寺藏安元三年写本、興聖寺藏

し、左の点を述べた（要約抄出する）。

- 日本古写本は同一系統である。○敦煌本も日本古写本と同一系統である。○敦煌本・日本古写本は、玄応音義の古い姿を留める。○宋版は日本古写本・敦煌本と別系統である。○高麗本も日本古写本・敦煌本と異なり、宋版と同じ増訂部分を持つ。
- 高麗本・宋版は、それぞれ別個に第二次増訂を行なっている。
- 高麗本・宋版には、反切の改変も見られる。

3. 『玄應一切経音義』本文研究の課題

右の中、もっとも多くの異本を比較した上田（一九八二）は、次の如くに結んでいる。

今後玄応音義を取り扱う場合には、改訂増補の部分を除き、誤写誤脱を原形に戻した姿にする必要がある。そして、そのためには諸本の校合が必要になる。複雑に絡みあっていて、どの本が第一次増訂どの本が第二次増訂というような単純な決定ができず、部分部分で決めなければならないのだからなおさらである。校正玄応音義の作製を志したわたくしの趣意をこのように述べて結びとする。

その後、上田正『玄応反切総覧』（一九八六年、交友印刷）で、十三種の異本校合によって、玄応音義原本の音注が示された。

しかし、音注以外の「校正玄応音義」は、未だ完成していない。

比較的新しい徐時儀校注『一切経音義三種校本合刊』（二〇〇八年、上海古籍出版社）でも、日本古写本が紹介されているが、校勘記に日本古写本はほとんど挙がっていない。

一九八〇年代の先行研究発表時には閲覧できなかった諸本を比較できるようになった現在、諸本校合による校正作業があらためて必要となっている。

三、石山寺本『玄應一切経音義』の現存本と書写時

1. 石山寺本『玄應一切経音義』の現存本

石山寺本『玄應一切経音義』は、石山寺一切経の一部として書写された。しかし、現在、石山寺一切経内に、『玄應一切経音義』は一卷も所蔵されていない。寺外に流出した石山寺本『玄應一切経音義』のうち、広島大学蔵の巻第二（第五および天理図書館蔵巻第九）が、『古辞書音義集成9 一切経音義（下）』（一九八一年、汲古書院）に収められた。この解題で、大東急記念文庫に巻第二十五が存することが紹介された¹⁰。また、同じ一九八一年に、名古屋博物館が巻第十二を収蔵した¹¹。その後、京都大学に巻第六・七が存することが知られ、日本古写経善本叢刊第一輯『玄応撰一切経音義二十五巻』（二〇〇六年、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会）に全巻写真が所収された¹²。なお、田中塊堂『日本古写経現存目録』（一九七三年、思文閣）には、奥書「應保二年二月廿六日書写了」の「安

藤柳司氏藏」の巻第二十が記載されている。

そしてこの度、巻第十が広島大学の蔵書となった。

右諸本が石山寺旧蔵本であることは、「一切経音義巻第一」等の内題前行に押された「石山寺一切経」無廓墨印から知られる。¹³⁾

2. 石山寺本『玄應一切経音義』の書写時

残存本の書写あるいは校合年等を記す奥書は、以下の通りである。¹⁴⁾

巻第二十四「應保元年九月十八日書了／僧□□／願以書写

功 必為往生因／共法界衆生 生西方淨利」

巻第二十「應保二年二月廿六日書写了」

巻第七「承安四年極月廿日亥尅許於法住寺／書寫了為往生

極樂也 僧昌圓之(花押)」

巻第二十五「承安五年三月廿三日於大谷書写了」

巻第十「二交了／承安五年四月廿六日比交了文字極僻／以

他本可比交了」

巻第十三「承安五年四月二十六日二校了」

巻第三「安元年八月廿一日未尅於春峰寺／書了」

巻第二・二十四以外は、承安四年(一一七四)から翌安元元年

(一一七五)にかけて書写・校合されている。この頃に、石山寺一切経として『玄應一切経音義』の書写がなされ、その折、既存の応

保写本を編入したものである。¹⁵⁾

新出巻第十の奥書には、「二交了／承安五年四月廿六日比交了文字極僻／以他本可比交了」とあり、巻第十三と同日の校了である。巻第十前後数巻を、この日に他本と校合したのである。

なお、奥書に唯一名を残す「僧昌圓」が「法住寺」にて書写した経が、他にも石山寺校倉聖教に現存することが指摘されている。¹⁶⁾

四、『玄應一切経音義』諸本における石山寺本

以下、新出の広島大学蔵石山寺本『玄應一切経音義』巻第十を諸本中に位置づけたい。比較諸本の依拠テキストは、次のとおりである。

大治本―『古辞書音義集成』所収本、中尊寺本―京都国立博物館蔵マイクロフィルム、石山寺本―原本および『古辞書音義集成』所収本、七寺蔵本・金剛寺蔵本・西方寺蔵本―『玄應撰一切経音義二十五巻』(二〇〇六年、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会)所収本、興聖寺蔵本―原本、東禅寺版―醍醐寺蔵原本、開元寺版―書陵部蔵本の写真版、思溪版―長瀧寺蔵原本・増上寺蔵本の写真版、高麗本初雕版―『高麗大藏經初刻本輯刊』(二〇一二年、西南師範大學出版社)、高麗本再雕版―『高麗大藏經』(一九七六年、東国大学校、金版―『中華大藏經』(一九八三年、中華書局))。

原本あるいは写真閲覧を御許可下さった所蔵者各位に、心より御礼申し上げます。

1. 石山寺本『玄應一切經音義』本文の書式

石塚晴通・池田証寿が分類した『玄應一切經音義』の書式に、古写本および宋版・高麗版『玄應一切經音義』の書式を当てはめると、左の通りとなる。

A形式 敦煌本・吐魯番本・七寺本（巻第1～10・13・14）・金剛寺本（巻第6）・興聖寺本（巻第1～3・7・9・12・15・16・19・20）・高麗初雕版（巻第2～6・16・19～25）・高麗再雕版（巻第1～7・15～25）・金版（巻第1～7・23～25）。

B形式 敦煌本・石山寺本（巻第6前半・20・24）・興聖寺本（巻第4・6・8・10・11・13・14）・高麗初雕版（巻第8・10・11・13・14）・高麗再雕版（巻第8～14）・金版（巻第9・10・13・14）。

C形式 聖語藏巻第6天平写本・石山寺本（巻第6後半・12）・金剛寺本（巻第9～11・24）・東禪寺版（巻第1・25）・開元寺版（巻第1・25）・思溪版（巻第1・25）。

D形式 聖語藏巻第4平安時代写本・中尊寺本・七寺本（巻第12・15～25現存本）・石山寺本（巻第1～5・7・9・10・25）・金剛寺本（巻第1～4・7・12～21・25）・天理図書館藏鎌倉後

期写本（巻第18）・興聖寺本（巻第17・18・21～25）・高麗初雕版巻第5補写部分（巻頭～第五紙）・東禪寺版（巻第3～5・7～24）・開元寺版（巻第3～5・7～24）・思溪版（巻第3～5・7～24）。

E形式 大治本・東禪寺版（巻第2・6）・開元寺版（巻第2・6）・思溪版（巻第2・6）。

日本古写本のうち、七寺本（巻第1～10・13・14）・金剛寺本（巻第6）・興聖寺本（巻第1～3・7・9・12・15・16・19・20）はA形式であることから、書写底本の古さが知られる。また、石山寺本（巻第6前半・巻第20・巻第24）および興聖寺本（巻第4・6・8・10・11・13・14）には、B形式が見られる。かく、日本古写本は、敦煌本・高麗版・金版と共に、比較的古い書式を留めている。

これに対して、東禪寺版・開元寺版・思溪版等の宋版は、C形式・D形式またはE形式である。これらは、掲出字と注文との区別が明確になるように後に整えられた書式である。

日本古写本でも、現存本で最も多いのはD形式である。D形式は、掲出字と注文の別が明確で、紙面も節約できるところであろう。本稿の対象である石山寺本巻第十も、このD形式である。

D形式を追い込み式にして更なる紙幅節約を図った書式がE形式である。早くから影印が出版され、『古辞書音義集成』の底本にもされた大治本（法隆寺一切経本）はE形式であり、比較的新しい書

式を採る。

石山寺本の書写時は大治本より五十年ほど降るものの、石山寺本は、大治本より古い書式である。

2. 石山寺本巻第十における目録の経名

『大正新脩大藏經』に『玄應一切經音義』が所収されていないこともあり、現時点では、高麗再雕版が『玄應一切經音義』研究の依拠本文とされることが多い。その高麗再雕版巻第十巻頭目録では、「一切經音義卷第十大乘論 陸／翻經沙門玄應撰」に続いて、左の経名が記される（出現順に順番を付す。原本は、一行一経名で記されている）。

〔高麗再雕版目録経名〕

1 般若燈論 2 大莊嚴經論 3 攝大乘論 4 十住毗婆沙論 5 大乘莊嚴經論 6 十地經論 7 菩薩地持論 8 菩薩善戒論 9 菩提資糧論 10 寶性論 11 佛阿毗曇論 12 百論 13 發菩提心論 14 三具足論 15 寶髻菩薩論 16 十二門論 17 緣生論
高麗初雕版・金版（廣勝寺本）の目録経名も、右の高麗再雕版目録経名と同一である。¹⁹⁾

以下、高麗再雕版と同一のものは経名番号のみ挙げ、高麗版と字句の異同がある場合は、字句の増減がある場合は、を傍に引く。

山田が高麗版に近いとした日本古写本は、以下の通りである。

①「興聖寺本目録経名」（鎌倉時代書写）・②「大治本目録経名」（大治三年（一一二八）書写）

興聖寺藏本および大治本目録経名は、右の高麗版・金版と全同である。²⁰⁾

③「七寺本目録経名」（安元三年（一一七七）頃書写）

1・2・3・4・5・6・7 菩薩持地論・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17

七寺本巻第五の本文経名は、高麗版・金版に等しい。²¹⁾ 7の「持地」は、誤認による転倒と見られよう。

④「金剛寺本目録経名」（嘉禎三年（一一三七）書写）

1・2・3・4・5 大乘莊嚴論・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17

金剛寺本も、右二本と等しい。²²⁾ 5に「經」の一字を欠くのは、誤脱であろう。

⑤「石山寺本目録経名」（安元（一一七五）頃写本）

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14（補入）・15・16・17

石山寺本の目録経名は、高麗版・金版に等しい。²³⁾ ただし、14三具足論の経名は、後から補入されている。

⑥「中尊寺本目録経名」（永久（一一三〇）天治（一一二六）頃書写）

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・

18唯識論

以上、①～⑤の日本古写経目録経名は、誤写・誤脱を除外すれば、高麗再雕版目録と同一である。⑥中尊寺本は、目録経名の最後に「唯識論」が挙げられる点が、右の諸本と異なる²⁴⁾。

一方、宋版一切経の目録経名は左の通りである。

〔東禅寺版目録経名〕

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・

17・18唯識論

東禅寺版も、⑥中尊寺本同様、最後に「唯識論」を付す²⁵⁾。開元寺版・思溪版も、この東禅寺版に全く等しい。

巻第十目録に「唯識論」を立てる宋版一切経・⑥中尊寺本は、次項に述べるごとく、後に整備された形式である。

3. 石山寺本巻第十における本文の経名

目録に続く本文の経名は、次の通りである。

〔高麗再雕本文経名〕

1・2・3・4・5・6十地 論・7 地持論・8 菩薩善戒經・9・

10・11佛阿毗曇 論・12・13・14・15寶髻菩薩經論・16・17

このように、高麗再雕版においても、目録経名と本文経名とは、完全には一致しない²⁶⁾。高麗初雕版・金版（廣勝寺本）本文経名も、

この高麗再雕版本文経名と全同である。

一方、日本古写経は、左の通りである。

①〔興聖寺本文経名〕

右の高麗版（初雕版・再雕版）および金版と全同である。

②〔大治本文経名〕・③〔七寺本文経名〕・④〔金剛寺本文経名〕

1・2・3・4・5・6十地 論・7 地持論・8 菩薩善戒經・

9・10・11佛阿毗曇 論・12・13・14・15寶髻菩薩經論・16・17・18

唯識論

⑤〔石山寺本文経名〕

1・2・3・4・5・6十地 論・7 地持論・8 菩薩善戒經・9・

10・11佛阿毗曇 論・12・13・14（補入）・15寶髻菩薩經論・16・

17・18唯識論

⑥〔中尊寺本文経名〕

1・2・3・4・5・6十地 論・7 地持論・8 菩薩善戒經・9・

10・11佛阿毗曇 論・12・13・（欠）・15寶髻菩薩經論・16・17・18

唯識論

右②大治本～⑥中尊寺本までは、経名18「唯識論」を改行標示する点が高麗版・金版・①興聖寺本と異なる。

よって、巻第十諸本は、本文の経名に「唯識論」を立てるか否かで、二分される。

しかし、「唯識論」を本文経名として行頭に出さない高麗版・金

版・①興聖寺本にも、「唯識論」とその掲出語・注文は書写されている。高麗版・金版・①興聖寺本は、掲出字と注文とで字の大きさを変えないB形式であるため、17縁生論の注文に続けて記される「唯識論」を、一見して経名と認識しがたい。

1. の本文書式の整理で、高麗版・金版・①興聖寺本が属すB形式が②大治本等より古い形式である、と考えられた。高麗版・金版は、宋版開寶藏を覆刻したものである。したがって、北宋版開寶藏完成（九七七年）以前の、注文と次の経名（唯識論）とが接合した古い本文を伝えるのが高麗版・金版・①興聖寺本であり、その融合本文を修正し、経名「唯識論」を改行立項したのが②大治本以下の諸本である、と考えられる。

なお、⑥中尊寺本の本文経名は、14三具足論の経名を欠いている。ただし、『三具足論』の掲出語「船舶」「邏戍」「恐味」「礪石」は、13發菩提心論の掲出語に続けて記載されている。すなわち、『三具足論』の掲出語四語は、『發菩提心論』中の語であるかのように書写されている。新出⑤石山寺本は、⑥中尊寺本同様に書写した後、14三具足論を後補している。補入前の⑤石山寺本は、⑥中尊寺本と同一本文であった。

一方、宋版一切経の本文経名は左の通りである。

〔東禪寺版本文経名〕

1・2・3・4・5・6十地論・7地持論・8菩薩善戒經・9・

10・11佛阿毗曇・12・13・14・15寶髻菩薩經論・16・17・18唯識論
開元寺版・思溪版も、東禪寺版に全く等しい。これら宋版一切経諸本の本文経名は、日本古写経の②④と全同である。

4. 石山寺本『玄應一切經音義』卷第十の本文

新出の石山寺本卷第十は、日本古写経で最多の書式を採り、目錄経名も日本古写経または高麗版・金版系であり、本文の経名は日本古写経の中尊寺本とのみ一致した。

以下、石山寺本卷第十の本文（掲出語・注文）を諸本と比較した結果の一部を示す（経名目録は既掲のため省略する）。ただし、石山寺本卷第十は画像公開の計画があるため全文翻刻はせず、高麗再雕版との校異の形でその冒頭を記す。

本文掲出は、見やすさを優先し、宋版（東禪寺版・開元寺版・思溪版）と日本古写経四本（石山寺本、およびそれと目錄経名が近い興聖寺本と大治本、本文経名が近い中尊寺本）に絞る。翻刻は、通用の字体で行なう。校異は、字体・字形の相違、誤写・誤脱・虫損等による欠字・欠損と判断される例は省略し、改行位置・文字の大小の相違も表示しない。【130下】等は、『高麗大藏經』（一九七六年、東国大学校）第三十二冊の頁数と段とであり、／は高麗再雕版の改行である。原本の段下げ・空白は、詰める。

なお、（ ）内に記した諸本略号は、次の通りである。

「日本古写本」石―石山寺本、中―中尊寺本、大―大治本、興―興聖寺本。

〔宋版〕東 東禪寺版、開―開元寺版、思―思溪版。

() 内の校異は、当該本では「」内の文字であること、+は当該本では「」内の文字が多いこと、-は「」内の文字が無いこと、*は前出校異と同一であることを示す。

【130下】般若燈論／第一卷／如蔑眠結反 (+「又」東開思 埤〔理〕石中大) 蒼 (+「云」東開思) 析竹膚也 (+「又」東開思) 聲類 (+「云」東開思) 蔑【131上】 (「蔓」石中大・東開思 也今蜀土及關中皆 (-「皆」大) 謂竹蔑／為 (「蔓」東開思) 音弥析音思歷反字從斤／分木為析今俗作枅〔析〕與石中大・東開思 皆從片 (+「也」東開思) 綴目賢結反謂以絲縛 (-「縛」中) 縉 (-「縉」中大) 染之解絲／成文曰縵 (+「也」石中・東開思) 檀札 (「利」石「札」大「机」中) 莊點反三蒼柿／札 (「利」石「札」大「机」中) 也今江南謂斫削木片為柿 (「柿」石中大・東開思) 關中謂之札* 或曰柿* 札* 柿* 音／敷廢反／第二卷 (-「第二卷」石〔後補〕中大) 鬻鬻聲類作韻又作 (-「作」東開思) 鬻籀文作 (-「作」石中大) 鬻同／子孕反下籀文作鬻同才心反／字林 (+「云」東開思) 甑炊器 (+「之」東開思) 也鬻大金也一日鼎／大上下小下若甑也／第三卷／窯師以招反說文燒瓦竈也 (-「也」中) 通俗文／陶竈曰窯是也／糞逐干算七鸞二反攢鉞也攢擲也／今江南僞人工用攢鉞音蟬侯／苦奚反／嘔

羯 (+「上」東開思) 烏没反下居謁反／第四卷／紫礦 (+「下」東開思) 古猛 (大「猛」) 反謂波羅奢樹汁也其色／甚赤用染皮氎等是也／鉞利 (+「上」東開思) 息廉反 (+「又」東開思) 廣雅 (+「云」東開思) 鉞籤利也 (+「謂」石) 刀銳曰【131中】鉞 (+「之」東開思) 也／第五卷／後攏 (「攏」石中大・東開思) (+「下」東開思) 以下、上字あるいは下字への注であることを示す宋版「上」「下」の異同は省略する) 力東反說文攏* 攏 (「攏」石中大) 也 (+「又」東開思) 三蒼 (+「攏」石中大) 云攏 (東開思) 所以／盛禽獸欄 (「闌」大) 檻* 也／犂牛漢書西域傳有犂 (封) 石中大) 牛鄧展 (「辰」石中大) 曰脊／上有突鞍 (案) 大・東開) 如橐駝難字作犂 (犂) 與石中大・東開思 音／妃封反今有此牛形小膊上有犂是也／垂胡又作頡 (胡) 石中大) 咽 (咽) 與石中大・東開思) 二形同戶孤反說文／胡謂牛領垂下者也論文作壺／非體也／第十卷／生堯工 (「紅」東開) 端反又音桓此草外似葱內／似 (-「似」大) 蒲而圓廣雅謂之葱蒲可以／為席生水 (外) 石中大) 中今亦名堯子也／箭筈工旱反字林 (+「云」東開思) 箭莖也 (-「也」石中大) 論文作竿／非也／鬻堅又作籀同力鎮力珍二反爾雅／鬻堅中郭璞曰鬻竹名其中堅／可以為席／第十一卷／明帆又作飄颻二形同扶劍扶 (+「イ本无」石) 嚴二／反釋名隨風張幔曰帆今或用【131下】布若簿 (-「若簿」石中大) 若席為之也／第十二卷／蟾蜍之鹽反下以諸反爾雅蟾蜍郭／璞曰似蝦蟆居陸地淮南謂之去父此 (山) 石東開思) 東謂之去蚊蚊音方可／反江南俗

呼蟻蝻音食餘反／第十三卷／迦通補胡反此言白鴿地也／大莊嚴經論／第一卷／懷厲力甚反下宜作悞力計反埋蒼／懷悞悲吟哀也又懷者顏色懼／只也方言懷敬也／攘袂而羊反攘除也下弥蔽反字（「字」石中大）苑／云袂襟也衣袖也謂揜衣袒（「袒」石中大）出／臂為攘袂也／閑裕楡句反裕緩也廣雅裕寬也亦／優足也／愀然又作湫同在酒反礼記云孔子／愀然作色謂顏色變動之兒也／鴿鶻尺脂反下許牛反爾雅鴿忌欺／郭璞曰今江東呼鴿鶻（「鶻」中）為（「為」石中大）鈎鶻／音格（「格」東開思）恠鳥也晝言夜視關西名【132上】訓侯山東名訓狐也（「訓侯山東名訓狐也」大）／第二卷／黔毗渠炎反依字黔黑首也／儲積直於反（「又」東開思）說文（「云」東）以下、宋版の＋「云」は省略する（儲待也稽也待也（「待也」大）／待（＋「音」石中大・東開思）直里反／椈上宅庚反（「又」東）以下、宋版の＋「又」は省略する（椈椈猶柱也浮圖椈皆／作此說文椈材也／地跌徒結反廣雅跌差也字書跌失／跣也跌蹶（＋「之」東）以下、宋版の＋「之」は省略する（也（「也」石中大）／匍匐步胡反下蒲北反說文匍匐手／行也亦（「亦」石大）顛（「顛」石中大）歷盡力（＋「也」石中大・東開思）／親昵又作暱同女乙反爾雅昵近（＋「也」石中大・東開思）又／云昵暱也親昵亦數近也暱音／祛反反／倚倨於蟻反倚猶依也下烏訝反字／書倨倚也今言倨倨倨臥皆／是也／羈強三蒼作縲又作冑同古大反聲／類冑以繩係取獸也下渠向反／韻集云施冑於道（＋「日」石中大・東開思）強今田獵家／施

強以張（＋「也施」大）鳥獸其形似弓者也／論文作搯俗字也／自擺字書作攄同補買反說文兩手／掣也廣雅擺開也【132中】可祛丘居（魚）石中大・東開思）反廣雅祛除去也／爆火方孝（＋「反」與石中大・東開思）普剋二反聲類爆熾（「熾」石大）噴（東開）起／也郭璞注山海經云（「日」石中大）爆謂皮散／起也／愧踏子亦反跟踏也亦（「亦」石）畏敬也謂恭／敬之兒也／第三卷／剽掠芳（「必」東開思）妙反說文剽刺也廣雅剽剝／也蒼頡篇剽截也下聲類作剝／同力尚反抄掠也（「也」石中大・東開）／雖呼故豆反說文雄之鳴為雉也廣雅雉（「雉」石中大）嗚呼也／招傷枯狹反又作劄口洽反通俗文／爪按曰招韻集作劄入也江南／今有（＋「劄」石中大・東開思）寶器當作此／惶悸古文瘳同其季反說文氣不定／也字林心動曰悸／竄惶榆乳反懶惰（「惰」大）也爾雅竄勞也郭／璞曰勞苦者多竄（＋「惰」石中・東開、＋「也」石中大・東開思）／上昞莫見反蒼頡篇旁視也說文昞／邪視也／瓌璋又作瓌傀二形同古迴反廣雅／瓌偉奇玩也瓌美也盛也

以下、紙幅の都合で省略する。これに続く巻末までの本文でも、系統を定める際に最も重要である「双立異文」²⁷は、高麗版・宋版と日本古写本三本（石山寺本・中尊寺本・大治本）との間のものが最多であり、日本古写本三本が高麗版・宋版と別系統であることが知られる²⁸。本文対照結果の掲出を省略した七寺本・金剛寺本も、高麗版あるいは宋版よりも、日本古写本（石山寺本・中尊寺本・大治本）

に近い。²⁰⁾

なお、石山寺本・中尊寺本・大治本の日本古写本三本は近似の本文であるものの、石山寺本は、大治本よりも、中尊寺本に近い。

五、まとめ

以上、新出の石山寺本『玄應一切經音義』卷第十承安五年写本について簡略に紹介し、本文の書式・目録経名・本文経名および本文を諸本と比較した。その比較結果は、左の如くであった。

石山寺本『玄應一切經音義』卷第十の書式は、日本古写本で最も一般的なものである。

『玄應一切經音義』卷第十諸本の目録経名は、次のように分けられた。

ア「唯識論」無し―高麗初雕版・高麗再雕版・金版・石山寺本
本・大治本・七寺本・金剛寺本・興聖寺本

イ「唯識論」有り―宋版（東禪寺版・開元寺版・思溪版）・中尊寺本

アはイより古い形式であり、石山寺本は古形式である。

一方、本文経名は、次のように分けられ、やはり、アはイより古い形式である。

ア「唯識論」無し―高麗初雕版・高麗再雕版・金版・興聖寺本
イ「唯識論」有り

i 「三具足論」有り―宋版（東禪寺版・開元寺版・思溪版）
大治本・七寺本・金剛寺本

ii 「三具足論」無し―中尊寺本・石山寺本「後補」

石山寺本卷第十は、整備されたイ形式に属し、中尊寺本に近い。本文の比較からも、新出石山寺本『玄應一切經音義』卷第十は、高麗版・宋版と別系統の日本古写本系統であり、中尊寺本に最も近いことが知られた。

今後、本資料をも活用した、高次の『玄應一切經音義』研究が期待される。

注

(1) 国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所を中心とする諸研究、参照。

(2) 佐々木勇「玄應撰『一切經音義』卷第五における本文と目録との経名不一致について」（「訓点語と訓点資料」一三三輯、二〇一四年九月）の注(2)、参照。

(3) 契丹版に入ったかどうかは、不明である。房山石経の『玄應一切經音義』も残存しない。

(4) 『一切經音義二十五卷』（一九三二年、西東書房）、『古辞書音義集成』（一九八一年、汲古書院）、日本古写経善本叢刊 第一輯『玄應撰一切經音義二十五卷』（二〇〇六年、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会）に、聖語蔵本・大治本・石山寺本・七寺蔵本・金剛寺蔵本・西方寺蔵本の影印が収められている。興聖寺本の原本調査は、国際仏教学大学院大学学長・落合俊典先生のご厚意で行なうことができた。興聖

寺ご住職ならびに国際仏教学大学院大学の皆様に御礼申しあげる。

- (5) 右注『一切経音義二十五卷』所収の「大正十一年五月二十五日」付の文章。

- (6) 「これを見たるのみにても大治本と慧琳本所載のものと麗蔵の本とが近き関係を保てるを知るに足るべし。これを以て推すに玄應の面目は宋元系統の本よりも、この系統の本に多く伝へられ、これらのうちに在りても麗蔵本よりは、大治本に多く存すといはざるべからず。果して然らばこの本はこれ玄應の真面目を徴するに極めて重要ななりといはざるべからず。」

- (7) 注(2) 佐々木論文で、石山寺本巻第五は、目錄経名では大治本に近く、本文経名では西方寺本に近いことを述べた。

- (8) 『古辞書音義集成 9 一切経音義(下)』所収。

- (9) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 一切経篇』(一九七八年、法蔵館、参照)。

- (10) 『大東急記念文庫貴重書解題佛書之部』(一九五六年十月)に、「新增書」として掲載されている。しかし、この巻第二十五は、いまだ影印が公開されていない。

- (11) 「名古屋市博物館だより19」(一九八一年四月一日)に、「受贈資料」として、石山寺一切経「統高僧伝」巻第三と共に、巻首の写真掲げた上で紹介された。その後、名古屋博物館「館蔵品図録 II」(一九八七年六月)に巻首・巻末写真とともに収載された。

- (12) この外、『弘文荘待買古書目』三十一号(一九五八年三月)164番に石山寺本『玄應一切経音義』巻第二十四の巻末写真が掲げられ、同三十七号(一九七〇年六月)167番に石山寺本『玄應一切経音義』巻第十三、同四十二号5(三越「古典籍逸品稀書展示即売会」目録(一九七二年一月))39番に巻不明の一帖が記されている(ただし、図版は無い)。この三巻は、

- (13) 現在、所在不明である。なお、某氏蔵巻第一を、本稿の筆者は実見している。天理図書館蔵巻第十八巻頭は、裁断されている。ただし、「石山寺一切経」無廓墨印の残画が見える。また、『弘文荘待買古書目』に依れば、巻第二十四にも同印が押されているという。

- なお、広島大学蔵巻第二、第五には、他巻で墨印が押されている内題前の一行が無い。石山寺一切経は、僧尊賢による天明七年(一七八七)の修補時に、卷子本が折本に改装された(『石山寺の研究 一切経篇』参照)。現装では卷子本に戻っているものの、『玄應一切経音義』はほぼ四行分で折っていたことが折本装時の折目から知られる(この点は、「四行置きに折本装であった時の折目が残っている」と、小林(一九八二)にも記されている)。ところが、広島大学蔵巻第二、第五の表紙に続く内題を含む面は、三行しかない。よって、本来存した巻頭第一行に、他巻と同じ「石山寺一切経」印が押されていたものと推測される。最初の一行が切り取られた可能性は、小林(一九八二)にも記されている。これについて、沼本克明「石山寺蔵の字書・音義について」(『石山寺の研究 一切経篇』所収)は、この巻第二、第五は、石山寺一切経印が押されたことと推定される明心・文亀以前に寺外に出た、と考えている。しかし、巻第二、第五のみ寺外に出たとは考えにくい。むしろ、印が押されていたからこそ巻頭第一行が裁断された、と考えるべきであろう。

- (14) 巻第十三・二十四の奥書は、『弘文荘待買古書目』に依る。

- (15) 巻二十四は、奥書の内容・書式が承安・安元書写他巻と異なる。さらに、唯一、B形式(本文・注とも大字で、改行後二字下げる形式)で書写されている。巻第二十も、機会を得て確認したい。なお、三越「古典籍逸品稀書展示即売会」目録(一九七二年一月)に記される巻不明一帖も「応保元年古写本」とある。

- (16) 張娜麗「京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』

について「(日本古写経善本叢刊 第一輯『玄応撰一切経音義二十五卷』所収)。

(17) ただし、注が一行の場合は大字とする。

(18) この部分は、底本が思溪版であることが巻頭経名目録から特定できる。

注(2) 佐々木論文、参照。

(19) ただし、高麗初雕版・金版は撰者を「沙門玄應撰」とし、「翻經」が無い。開寶蔵は単に「沙門玄應撰」としていたのであろう。日本古写本諸本も、「沙門玄應撰」である。

(20) 興聖寺本巻頭目録は一行一経名で書写されており、二字の「百論」にも一行を使っている。この書式が古いものであろう。しかし、大治本巻頭目録は、一行三段で三経名が書写されている。大治本の第一帖巻頭「一切経音義目録」もこれに等しい。

(21) 七寺本巻頭目録は、一行一経名の古い書式で書写されている。

(22) (23) (24) ただし、これら諸本の経名は、上下上下の順で二段に書かれる。

(25) 東禅寺版は、「一切経音義卷第十 納」の内題の次に「唐大慈恩寺翻經沙門 玄應撰」として、次の行頭に「大乘論」と掲げ、一行に二経名を記す。

(26) この点は、注(2) 佐々木論文を御参照願いたい。

(27) 宮澤俊雅「倭名類聚抄諸本の系統推定——十卷本卷三〇六を中心に——」(北海道大学人文科学論集) 18、一九八一年三月)、同「出雲国風土記諸本の親疎関係」(北海道大学文学研究科紀要) 111、二〇〇三年十一月)、参照。

(28) 高麗版と宋版とでは、日本古写本は高麗版に近い。

(29) しかし、興聖寺本は、石山寺本・中尊寺本・大治本とはほとんど一致しない。興聖寺本は、「攝大乘論」に「第九卷」の見出しを立てないこと、「佛阿毗曇下卷」注文の出典「廣雅」を「廣邪」に誤る事、同じく「古貝垂毛」を「古臭垂毛」とすること等、高麗初雕本と一致する。後二点は、高麗

再雕版では修正されている。よって、興聖寺本は、高麗初雕本を底本とした写本である可能性が高い。

書式・目録経名・本文経名においても、興聖寺本は高麗版・金版と全同であった。日本古写経中には、底本を明示せず、宋版あるいは高麗初雕版または再雕版一切経を書写したものが他にも相当数存するものと思われる。

〔付記〕石山寺本『玄應一切経音義』巻第十を広島大学の蔵書とするため、富永一登図書館長(当時)ならびに広島大学図書館の皆様(一方ならぬ)尽力をいただいた。記して、御礼申しあげる。

— ささき・いさむ、広島大学大学院教育学研究科教授 —